

様式第3号

令和3年7月12日

登米市議会議長 関 孝 様

太陽・みらい21

代表 氏 家 英 人



資料研究報告書

研究の概要は次のとおりであります。

1 研究目的

東京電力福島第一原発事故の状況把握と原発廃炉に向けた取り組みの研究

- ・ 原発事故の実際
- ・ 現況
- ・ 廃炉への取り組み

原発事故がもたらした地域への影響の研究

- ・ 事故に起因する混乱
- ・ コミュニティの現実

2 研究先

東京電力廃炉資料館

東日本大震災・原子力災害伝承館

3 調査期間

令和3年7月3日

4 研究の経過と結果、ならびに所見

別紙添付

5 添付書類

両館の配布資料

6 研究者指名

氏家英人、田口政信、及川昌憲、曾根充敏



◆東京電力廃炉資料館および東日本大震災・原子力災害伝承館での研究について

1. 資料研究の経過

本市は東北電力女川原子力発電所のUPZ圏内である。震災以降、同原子力発電所は運転を停止し、1号機については廃炉を、また2号機については新たな安全対策の上、再稼働を目指している。

現在は広域避難計画の精度を高める作業が継続して行われている状況でもあり、避難対象地域と避難者受け入れ地域を併せ持つ本市において、われわれにも原子力についてより正確な知識が求められてくる。

しかしながら、原子力政策については中立的な立場での論評が少なく、情報に基づく判断をし難い面も併せ持つ難関課題でもある。

世界の原子力発電再考の契機となった東京電力福島第一原子力発電所事故の事実関係を正しく整理し、内容の理解を深めることにより、個々の識見の一助とすることを目的に福島県双葉地域の広報施設に赴き資料の調査研究を実施した。

※ 現在同施設はコロナ禍対応を採っており、施設利用は予約もしくはキャンセル待ちのみでの対応である。また、緊急事態宣言等、何らかの措置が発出されている期間は一切利用できない。

2. 東京電力廃炉資料館での研究概況

この施設は東京電力が、福島第二原子力発電所が立地する福島県双葉町に設けた施設で、原発事故前は「エネルギー館」として、原子力発電と東京電力のPR活動に用いていた施設である。第一原発の事故と第二原発の廃炉が決まったことを受け、原子力事故の事実と廃炉事業の現状を知らしめることを目的に、展示改修を行い廃炉資料館として開館している。言うまでもなく東京電力ホールディングス株式会社は原発過酷事故の原因企業であるため、情報としては論評を排除した具体的な情報が提供されているものと期待される。

なお、当該施設においては新型コロナウイルス感染拡大予防の取り組み中であり、緊急事態宣言発出の前後を含め休館措置（令和3年6月18日から再開館）がとられる。見学は60分のツアー形式（スタッフによるガイド説明）となり、予約の上（予約なしの場合はキャンセル待ちなどの空き待ち）での見学となっている（同年7月12日から再休館）。

見学制限中であることから、内容的には三分の一程度（丁寧な見学には3時間から半日程度必要とのこと）の調査になった。それでも先方が用意するツアー形式であるため、要領よく学べたと思われる。

施設は3つにゾーン分けされており、ゾーン1は「プロローグ」、ゾーン2は「記憶と記録・反省と教訓」、ゾーン3は「廃炉現場の姿」をテーマに設定されている。今回の見学ツアーでは主にゾーン2とゾーン3で構成された内容であったことから、それらから抽出して記載する。

ゾーン2では、事故の引き金となった地震発生から津波襲来、事故を引き起こすに至った経緯と、冷温停止までの事実をまとめたものを学びとることが出来る。脚色のないドキュメント映像を介した構成など、実際の事象が一つ一つ異なる理由から導かれたことを理解できる。

すなわち、

- ・ 福島第一原発事故は、福島第一原子力発電所内にある6つの原子力施設のうち1号機から4号機で起こった事故のあらましであり、それぞれの事故原因とその経過について因果関係はあるが、各々が異なった事象がある。
- ・ 福島第一原発事故の重要な視点となる放射能に伴う汚染については、象徴的にメディアで報道されている建屋の水素爆発が起こった1、3、4号機に起因するものは少なく、水素爆発を起こしていない2号機から大部分が排出されたものであること。
- ・ 過酷事故に至った施設は、1、2、3号機であり、建屋爆発を起こしている4号機は過酷事故扱いに至っていないこと。

また、

- ・ 地震発生時には、福島第一原子力発電所内の設備異常は発生せず、自動的に設計通りの運転停止がなされた。
- ・ 津波は、福島第一原子力発電所に備えられた対応能力を超えるものとなり、原発安全システムの重要部分を襲った。
- ・ 過酷事故に陥ったそれぞれの原因と事象が異なる。
ことなどを、映像をもって学べるものになっている。

同様に、ゾーン3では廃炉を進める取り組みを紹介しており、喫緊の課題たる汚染水・処理水の現状や、現に廃炉作業が進む様子を見られる。さらには炉心溶融した原子炉やその内部、すべての根幹である燃料デブリなどを質的に疑似体験できる。直径4メートルほどの炉心。量的に「些細なもの」が引き起こす過酷事故の影響に改めて、忸怩たるものを感じたところでもある。

廃炉の現実としては、未だ技術途上にあると思われる。福島第一原子力発電所1号機から3号機までは、過酷事故に至っており炉心溶融の残骸は原子炉格納容器内にある。周知のごとく、この撤去方法が確立途上にあり、廃炉には40年ほどかかるとも言われている。一方で同発電所4号機においては、事故当時定期点検中で燃料は原子炉装填されておらず、当然デブリ取り出しなどの困難事象も発生しないが、作業は先行していない。デブリ撤去が生じる原子炉と他原子炉の廃炉作業の間に差を生じさせない理由は、今回の研究では明らかにできなかった。

今回学んだ限りでは、たとえ順調に廃炉作業が進んだとしても相当な時間と経済的な負担が発生することは想像に容易いことである。展示を通して、人類が持つ科学技術の未熟さ

もあり、原子力が持つ膨大なエネルギーに対し、まだまだ開発途上の課題を抱えていると感じた。

3. 東日本大震災・原子力災害伝承館での研究概況

公益財団法人福島イノベーション・コースト構想推進機構が管理運営する同施設は福島県双葉町にあり、震災被害後の再開発地区にある。前述の廃炉資料館が原子力施設の被災と（過酷）事故に至った事実や廃炉作業を中心に構成されているのに対し、伝承館では原子力とともに歩んできた地域が過酷事故によってどのように変わったか、その変遷の様子を知ることが出来る。事実と体験によりまとめられた内容になっており、展示物と映像から当時の大規模災害の状況とその後の復興過程を学ぶことが出来る。

入場直後はシアターホールにおいて原子力発電所がもたらした地域の発展から、津波被災と原子力事故によって帰還困難区域として荒れていく様子について、映像をもって概略的に紹介していた。

その後は時系列的な構成となるが、展示物の多くは地震と津波により被災した物品が多い。原子力過酷事故によるものは映像的に体験が可能だが、逆に可視化できない汚染であることを改めて実感する。

原子力災害の部分は口伝的に伝えられている。展示資料は待避混乱中の写真などから推察される程度であるが、映像は個人個人の体験を語り継ぐ内容であり、実際には、地震避難・津波避難・放射能避難という具合にそれぞれが連続して発生する事態に手立てなく緊急回避を繰り返す困難さを伝えている。やっとの思いで避難先にたどり着いた際に、いわれの無い放射能差別に苦しんだという記録は胸を打つものがあった。

双葉地域は、原子力災害が大きく報じられているが、地震に起因する津波被害も三陸沿岸部同様、深刻なものがある。震災復興にも力はいれられているものの、そもそも人々が生活する環境は未だ途上である。

この建物が立地する一帯は、海にも程近い平坦な土地であった。いわゆる土地区画整理によって造成されたところで官公街にもなるようだが、周辺に賑わいが生まれるには、まだまだ時間が必要ではないかと感じた。

【所見】

太陽・みらい 21 は、福島県双葉郡富岡町にある東京電力廃炉資料館と双葉町にある東日本大震災・原子力災害伝承館において福島第一原子力発電所事故の資料研究を行った。「廃炉資料館」は、福島第一原発事故の記憶と記録を残し、二度とこのような事故を起こさないための反省と教訓を社内外に伝承するための施設で、長期にわたる膨大な廃炉事業の全容を見える化し、その進捗をわかりやすく発信するために無料で公開している。

なお、同施設はコロナ禍による何らかの措置中は見学できないなど、細心の配慮の下での開館になっている。

「大震災・原子力災害伝承館」では、震災前から震災当時、現在を通じて、複合災害がもたらしたものと、その後の復興過程を学ぶことが出来た（※入館料 600 円也）。特に、過酷事故後の地域変化は、実際の経験に即した内容となっており、一つの物事がもたらした影響の重大さを実感させられた。

帰りは国道 6 号線を浪江町まで北上し、帰還困難区域の現状を車窓から確認した。人の気配が全く感じられない草木に覆われた家や店、工場など…。10 年間、そのままの町の姿に静まり返る車内…。一方、避難指示が解除された区域は、大地震、大津波、そして原発事故という未曾有の複合災害からの復興の様子を見ることができ、とても感慨深く、また、有意義な資料研究となった。

この研究は、より現場に近い現地の情報に直接触れることにより、それぞれが改めて課題に対する理解を深めることを期した調査であるが、高度な政治的判断を求められることから、統一した見解や個々の判断については明言を控えるところでもある。しかしながら、加工された情報に溢れる社会にあって、より現場に近い情報に直接触れることが出来たことは、直接政治に携わる者として、大変貴重な機会であった。

われわれ「太陽・みらい 21」は、調査に基づく正確な情報の収集と、確実な咀嚼から判断することを大切に活動しており、加工が少ない情報源に触れることは、政務活動の基本と心得ている。

福島第一原子力発電所事故は 1、3、4 号機の原子力建屋が爆発する衝撃的な映像が象徴的である。しかし、爆発が直接的に大規模放射能放出に関わったわけではなく、爆発事故を起こさなかった 2 号機から発生したことはなかなか理解されていない。なぜ事故が起こったか、本当の原因は何か。原因企業である東京電力の率直な分析に自らの眼で触れることができ、正確な情報会得につながった。

原子力政策は、世論的にも東京電力福島第一原子力発電所事故を契機に大きな再考を迎えた。事故発生から 10 年を経過してもなお議論の溝は深く、個人的検証がないままに、それぞれの立場からの情報に流されることも想定される。そのような中において、東京電力が展開する資料館で公開されている情報は、現地の情報源に接するという観点からも大変貴重な機会であった。

後日談になるが、東京電力は教訓としてインターネット上に過酷事故の要点をまとめている。この調査から知識を得たことにより、より正確に過酷事故を起こした経緯を読み取ることもできた。今回の調査でそれぞれが得た知識を、しっかりと意思決定に生かしていきたい。

劇場型報道に流されない情報の活用と咀嚼を心掛け、市政に反映させたい。







